

雑草イネの効果的な発生拡大防止対策

1 背景・目的

雑草イネは栽培品種に混ざり生育し、玄米果皮が赤く製品に混入すると等級落ちや減収を招く(図1)。脱粒性が高く、ほ場に落ちた粃は翌年以降の発生源となるため、拡大防止対策が重要である。



図1 雑草イネ混入玄米

2 技術のポイント

- (1) 雑草イネの出芽時期や生存期間は発生地や系統で異なり、防除対策は少なくとも3年間実施する必要がある(図2)。
- (2) 代かきと移植の間隔は3日程度と短くし、除草剤を3回処理する体系により発生拡大を防ぐことが可能である(図3)。

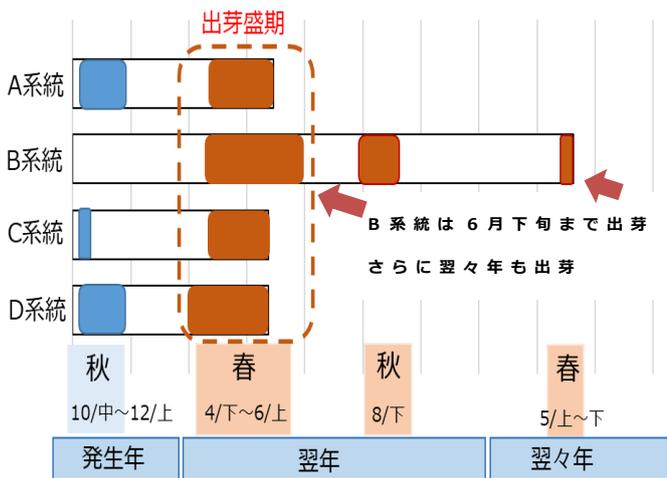


図2 系統別雑草イネの出芽期間

(2019~2021年各秋播種後、翌々年まで調査)

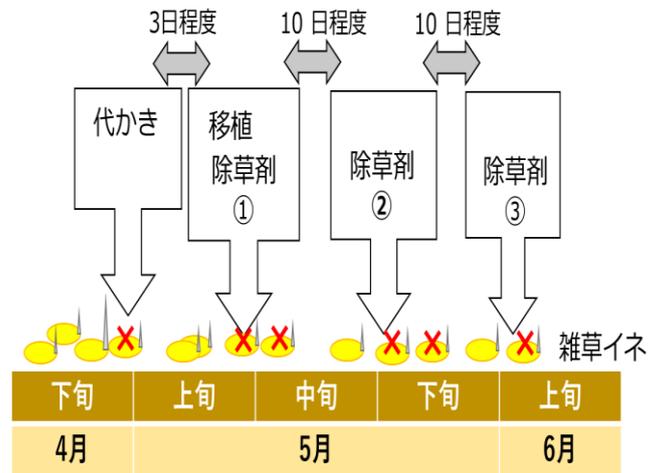


図3 拡大防止対策のイメージ

3 成果の活用と残された問題点

- (1) 発生源となる2番穂の稔実を防ぐ為、刈取後速やかに秋耕する。
- (2) 発生したほ場で水稻を作付ける場合は、直播栽培を避けて移植栽培とする。発生密度低減後でも直播栽培すると生存種子が出芽して発生が拡大する場合がある。
- (3) 晩植栽培では、普通期移植栽培に比べ除草剤使用回数の低減が可能である。

問合せ：作物栽培グループ TEL 076-257-6911
 担当者：田中澄恵、中野知行

※本研究は、農林水産省委託プロジェクト研究「直播栽培拡大のための雑草イネ等難防除雑草の省力的防除技術の開発」の支援を受けて行った。